

〔仏教の美術展によせて〕

仏像の胸前紐結びの形式

—止利様式仏像の源流の手がかり—

当館には石造の如来像が幾つか所蔵されていますが、それらは、いずれも、中国で最初に仏教が開いた北魏時代の典型的な作品として貴重なものです。

その中に、胸前に着衣の紐の結び目を見せるものが二体ありますが、それらは、日本の飛鳥時代の止利派制作による如来像の胸前に見られる結び紐との関連において興味を引かれるものです。この二体は、どちらも北魏の龍門石窟に彫られている仏像の様式に属するので5世紀末期ないしは6世紀に作られたと考えられます（一体は6世紀の銘入り）から7世紀に作られたのが国止利様式の仏像の源流に充分なり得るものです。

その内の一体、釈迦如来立像（写真1）は大衣（仏像の上着）を左肩から右肩にかけて着ており、余った布を左の腕にかけていますが、大きく開いた胸には下衣（下着）の僧祇支の太い衿が見え、その衿の下に紐とその結び目が表わされ、紐の両先は長く大衣の上を覆って前に垂れています（図1）。これに比べて、もう一方の孝昌2年（526）の銘を台座の背面に刻んでいる二仏並坐像（写真2）の方はどうか。向って左の釈迦如来と右

の多宝如来はどちらも、先ほどの釈迦如来立像と同様な着方で大衣をまとい、その裾を台座の前に垂らして美しい衣文を見せる裳懸座のスタイルを取っており、この裳懸座こそは、止利派仏像に取り入れられているものですが、ここで問題とすべきはその胸元です。写真1の像とは異なり、ここでは、大衣の下に衿状のものが見え、その紐を中央で結んで垂らしていますが、結び目の位置は写真1の像よりずっと高く、紐の先も大衣の胸前の縁のところまで終わっています。更に、この紐の下に重なって見えているのは斜目に走る僧祇支の衿かと思われ（図2）。

このように上の二件の仏像の胸前の形式は明らかに異っており、この他にも同じ北魏の仏像の中に種々の胸前の紐結びの形が見られます（図3、4、5参照）。

さて、それでは、我が飛鳥時代の止利派の仏像はどうかと申しますと、最も保存が良く、銘文に推古天皇31年（623）に止利派師によって作られたとある法隆寺金堂本尊の釈迦如来坐像ですが、その胸前は同じ様に広く開き、左肩から右脇に渡る僧祇支と、紐の先端が見えています（図6）。これは、先



1. 釈迦如来立像 北魏



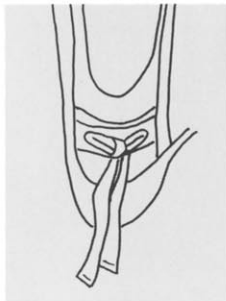
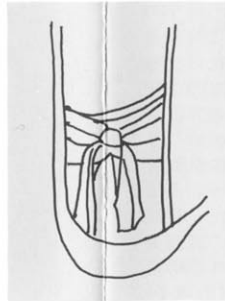
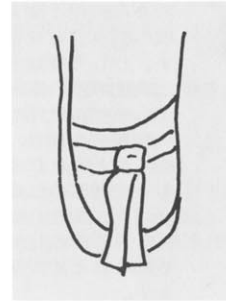
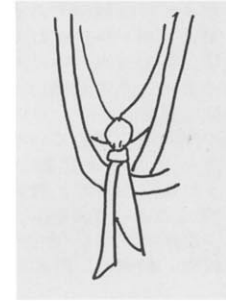
2. 二仏並坐像 北魏 孝昌2年(526)銘

に見た北魏仏の例には見られなかった形です。次いで、同じく法隆寺に伝えられる戊子年（推古36年＝628）の銘を持つ釈迦如来坐像は、上記の金堂の釈迦像のミニチュアとも言えるものですが、胸前の形式は異っています（図7）。ここでは、結んだ紐の両端を真横に向けて、大衣の上にはみ出させているのですが、これに似た形式のものに、法隆寺から国に献納された、いわゆる法隆寺献納金銅仏（四十八体仏）の中の149号像（図8）があり、こちらでは結んだ紐が大衣の外にはみ出さずに、大衣の下に紐を縮めていると理解出来ます。

止利派の系統を引くその他の遺

例として、鳥取県三徳山三仏寺の経塚より出土したと伝えられる白鳳時代の如来坐像があり、その胸前の形が目玉されます（図9）。以上のような図6～図9の形式が止利派及びその系統を引く仏像の胸前に見られる主なものですが、これらは、いずれも、先に見ました北魏の場合と形を異にしています。それに対して、実は、朝鮮三国時代の如来像には、図6や図9の形に近いものがあるので、矢張り、日本の仏像は朝鮮の仏像に近いという感もいたします。しかし、それらの源は中国にあるはずですから、それを探ることが重要になって来ます。

この問題に関しては、近年、興

図1. 大和文華館蔵
釈迦如来立像図2. 大和文華館蔵
二仏並坐像図3. 龍門第十三窟(蓮花洞)
如来立像図4. 龍門寶陽洞中洞
如来立像図5. 雲岡第六洞
如来坐像

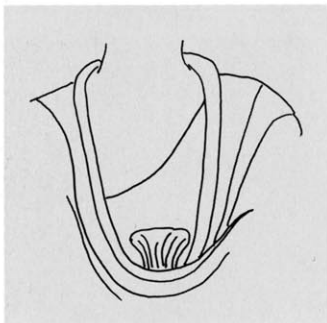


図6. 法隆寺金堂本尊
釈迦如来坐像 推古31年(623)銘

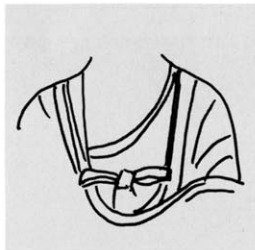


図7. 法隆寺蔵
戊子年銘釈迦如来坐像



同上 大衣の裾下に見る紐の先端

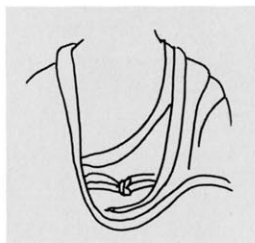


図8. 四十八体仏149号
如来立像

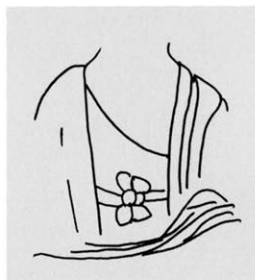


図9. 伝三徳山三仏寺経塚
出土 如来坐像

味深い見解が出されています。それは、止利派の仏像に見ました以上の結び紐は、これまで、誰もが“裙(スカート)の紐”と解釈していたのですが、そうではなく、「これは大衣の下に着ている僧祇支(胸に見えている)を結ぶ紐であって、一種の飾りであり、当時の皇帝の服装である冕服の紳(大帯)が二条に長く垂れているのを真似て、垂らしているのである。裙の紐は腰の辺りに結ぶので、それを胸元から垂らすのは無理である。」とされ、更に「紐が外に垂れていない場合は、紐を大衣の中に隠しているものであり、その証拠に(法隆寺釈迦像に見るように)その先端が大衣の裾の下に見えている。いつごろからこの形が北魏で取られるようになったかが、飛鳥仏の源流を探ることになる。」とされる小杉一雄氏の見解(『中国仏教美術史の研究』新樹社、昭和55年)です。

現在までの調査では、止利派の図6と同様な胸元と大衣の裾下の紐の組み合わせは北魏には見出せず、むしろ朝鮮・三国時代に同様な胸元の紐の形が見られるのですが、小杉氏の見解にある通り、更に北魏仏を探り、また、朝鮮仏を探ることで、日本の最初の仏像である止利派の仏像の源流が、今まで以上に明確になり、また、他国には見られぬ止利派独自の変遷をも探ることができるようになります。(村田靖子)